

■ワンポイントアドバイス

印象に残る説明や単語の選定（ワーディング）

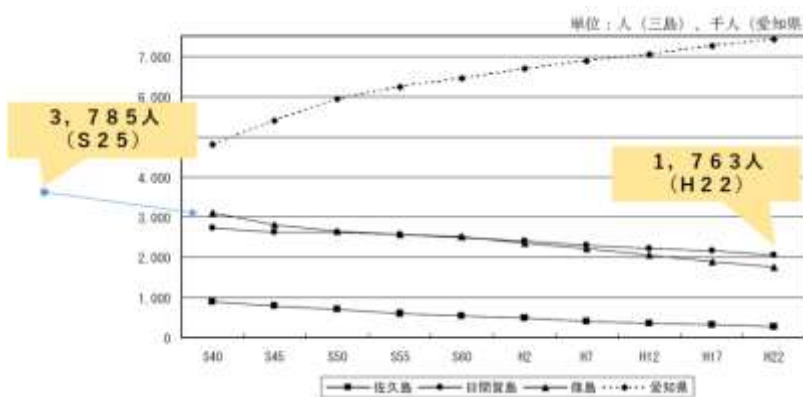
人口などに関するデータについては、「減っている」だけではなく、「どれだけ減っているか」を正しく認識してもらうことが危機感に直結します。

そこで、時系列のグラフなどについてどのように解釈するかを的確に伝えることが重要となります。その際、わかりやすい言葉や理解しやすいイメージに置き換えて説明することで、参加者が「じぶんごと」と捉えるとともに、周囲の人に伝える時も、インパクトのある言葉で広めることができ、場合によっては取組の際の「共通言語・合言葉」として活用されることもあります。

■人口減少のインパクト（愛知県南知多町篠島地区の例）

○これまでの人口推移

（愛知県「あいちの離島」より）



これまで

60年で半分に

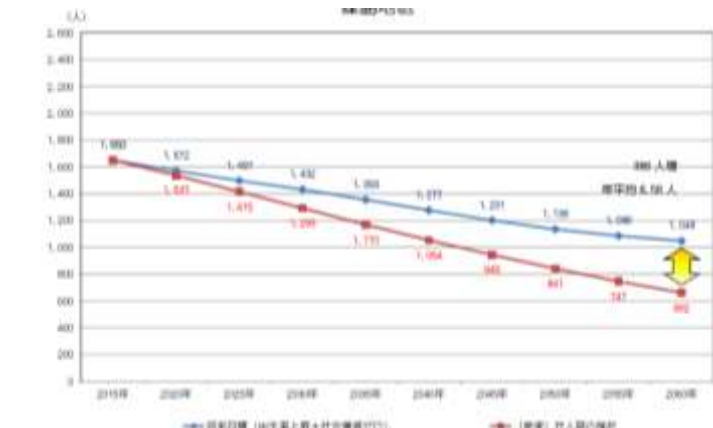


これから

30年で半分に

○今後の人口推計

（「南知多町人口ビジョン」より）



■高齢化による負担増のインパクト（広島県江田島市の例。地域経済分析システム(RESAS)より。)

高齢者福祉の費用や労働力の負担を、騎馬・おんぶに例えて印象づけ。

1980年 **4人で1人** → 2010年 **3人で2人(上2人の騎馬)** → 2040年 **1人で1人(おんぶ)**

老年人口（65歳以上）	6,543人（15%）	9,674人（35%）	6,307人（45%）
生産年齢人口（15歳～64歳）	26,814人（64%）	14,888人（55%）	6,464人（46%）
年少人口（0歳～14歳）	8,535人（20%）	2,461人（9%）	1,045人（7%）

小さな拠点・地域運営組織、という言葉では具体的な取組やその必要性が理解しづらかったり、人によってイメージ・解釈が異なることから、近隣の地域や全国の取組事例について理解し、受講者同士での“この事例のようなことをしていきたいね”という共通認識を原動力に「じぶんごと化」を促します。

留意事項

- 各地で開催されているフォーラムや説明会、国が発行している事例集において「先進事例」や「優良事例」が紹介されています。
これらの事例を地域住民の理想像として目指すことはもちろん大事ですが、地域住民がこれから検討の場に着こうとしているような立ち上げ期・初動期にある地域では、「あそこはあの人物がいたからできた」などと自らの地域と距離を置いて捉えてしまったり、逆に重荷に感じてしまうかもしれません。
このため、あくまでも“目標の一つ”として共有する程度にとどめ、その事例が「先進事例」や「優良事例」と呼ばれるようになったポイントを的確に学ぶ（教える）ことが重要です。
- 「じぶんごと化」を促す上では、身近な取組事例（地域住民の年齢構成や発生課題、取組分野といった“近い将来の自分たちの姿となる事例”）について、見聞きしてきた行政職員や中間支援組織から情報を提供してもらったり、当該地域の住民と交流して取組における苦労話などを教えてもらうことが有効と考えられます。

プログラム例 1 身近な事例を探して整理する

行政職員としては、取組事例の紹介を求められた際には、他の自治体における優良事例や先進事例を提供してしまいがちです。

しかし、まずは自分たちの自治体内に目を向けてみて、自治体のなかで先進的な取組を行っている身近な事例を整理し、必要に応じて発信してみましよう。事例として紹介を受ける側もされる側も、「じぶんごと」として捉え、活動の発展に繋がっていくと考えられます。

ステップ 1 身近な「たまり場」や助け合い活動を探す

ホームページでの検索だけでなく、福祉担当職員や地域担当職員にも投げかけ、地域住民が集う身近な「たまり場」や助け合い活動がないかを確認してみましよう。コミュニティビジネスなど事業性を意識した「先進事例」ではなく、“これから取組を始めたい、考えたい”と思っている地域に紹介するためという視点から、多くの身近な取組について把握・整理し、口頭やホームページ、SNS などを通じて情報を発信します。

ステップ 2 関係者からヒアリングを行う

こういった取組は HP や事例集等で取り上げられていることが少ないため、“他の地域にも紹介してみたい”と思う事例については、関係者やよく知る職員などにヒアリングを行い、取組の経緯や活動の内容、参加者・利用者の状況などについて把握します。

ステップ 3 端的にポイントを整理する

身近な事例については、まだまだ総合的に「先進事例」として紹介できるほど成熟していないと考えられます。このため、この事例において地域住民に伝えたいポイントを絞ってわかりやすく整理し、伝えていくことが重要と考えられます。

プログラム例2 実践者から話を聞く

ある取組事例について学びたい場合には、その取組を実践してきた人（実践者）から深く学ぶ方法と、多様な取組事例について知っている人（その取組と直接関わりのない中間支援組織等）から学ぶ方法の2つがあります。

具体的に学びたい事例が明確にある場合には、直接支援してきた行政職員や中間支援者、実際に取り組んできた地域住民から話を聞くとよいと考えられます。

ステップ 1

行政職員や中間支援組織等から話を聞く

地域の取組を直接実践してきた地域住民から話を聞く前に、行政の考え方や制度の整備、具体的な支援の方法などについて学ぶことが重要と考えられます。

そこで、制度設計と地域運営組織・小さな拠点の立ち上げ期を実際に支援してきた行政職員や中間支援組織等から、話を聞くことが有効と考えられます。

彼らを地域に招き、より多くの地域住民に聞いてもらうばかりでなく、自分たちの市町村の職員にも学んでもらうことが有効と考えられます。

ステップ 2

視察に行き、地域住民から話を聞く

行政職員や中間支援組織からの話を聞いた上で、実際に現地に視察に行き、地域住民から話を聞くことは非常に参考になります。

実際に、具体的な取組を行っている地域住民から、話し合いのきっかけや合意形成までのプロセス、現在の取り組み上の工夫・努力点と地域運営組織・小さな拠点の経営状況など、相手方の負担にならない範囲で、交流を通して直接教えてもらうことは、自らの地域での活動のあり方を考える上でも、極めて有益と考えられます。

プログラム例3 中間支援組織から話を聞く

中間支援組織は、各地の様々な事例について幅広い知見を有しているとともに、そのポイントを第三者的に整理しており、個別の事例について、客観的な視点から説明することができます。

中間支援組織に、現在の地域の状況や取り組んでみたいことを伝え、参考となる事例について情報を提供してもらいましょう。

ステップ 1

地域の状況と取り組んでみたいことを伝える

一般的に、中間支援組織は多様な事例について様々なノウハウや知見を持っています。自治体職員や地域住民などから、地域の課題と取組の課題、取り組んでみたいことを伝えることで、その中から最適な事例を抽出して“見聞録としての研修会”を組み立ててもらえたり、各事例から得られる知見を地域で活用していく場合のポイントなどをアドバイスしてもらえたりすると考えられます。

ステップ 2

多くの地域住民で話を聞く

今後、地域住民が取組を進めていく上では、より多くの人に目指すべき方向性を共有し、協力してもらうことが重要です。

そこで、研修会においてはより多くの人に来てもらい、話を聞いてもらっておくことが重要と言えます。

■ワンポイントアドバイス 事例の整理

都道府県の担当者は、市町村や地域住民から事例の紹介を求められる機会も出てきます。そのため、多様な事例について自ら情報を収集するとともに、それらの事例を整理・分類しておくとう便利です。

取組の分野ごとのみならず、担い手や受益者の範囲・規模、地域特性（住宅地か農山村か、高齢者率の状況、リーダーや担い手の有無・見つけ方）、現在の発展段階などの別にいくつかの事例を整理しつつ、足りない部分については近隣の都道府県と情報交換しながら事例を収集しておく、市町村や地域住民にとっても有益になると考えられます。

身近な事例の例

(1) 地域住民で経営する飲食店・カフェ

日替わりシェフの店「さくらそう」(四街道市)

飲食支援・
生きがい

地域住民の中でシェフをやりたい人が、可能な範囲で・日替わりでメニューを考え、レストランを経営。

■ サービス内容

- ・地産地消を基本とした、食べる人、食材を作る人、料理を作る人が、それぞれ喜びを感じるコミュニティレストランを運営
(1食あたり、800~1,000円)



■ 利用者数・規模

- ・営業日数：月平均15日
- ・来店者：1日平均25名
- ・収容人数：最大30名

■ 運営

- ・登録シェフ15(個人、団体)
- ・売上の25%をさくらそう使用料として納める(他に年会費あり)
- ・執行部が日々のシェフの活動を支援(月次収支決算の状況報告等)

The image shows a calendar interface with colored bars indicating the presence of different chefs on various days. The colors include red, yellow, and purple, corresponding to different chef rotations.

「さくらそう」HP、ヒアリングより <http://www.sakura-sou.com/index.html>

(2) 住民のたまり場・コミュニティカフェ

「たまり場・たろう」(茨城県筑西市)

地域福祉・
高齢者福祉

高齢者を中心とした地域住民が日ごろから集まり、銘々にイベント・交流を行いながら、世代間交流、住民間相互支援を展開している。

■ サービス内容

- ・常設サロン「ほっとひと息サロン」、「昭和の歌声かふえ」(参加費300円)
- ・「たまり場楽校」ギターやウクレレ教室等
- ・ワンコイン寺子屋

■ 利用者数・規模

- ・毎週水曜、第1・第3土曜の11時~17時に「たまり場かふえ」と、随時14時~16時に「たまり場楽校」を開催し、月平均で約200名が参加

■ 運営

- ・「下館地域在宅介護を支える会」が運営
- ・財源は、会費と助成金その他、カフェの利益、手作り作品販売の手数料、講演活動での謝金など。年間事業規模70万円で収支トントン
- ・当初は場所を転々としてサロンを開催していたが、現在は代表の元自宅を利用



茨城県社会福祉協議会HP、ヒアリングより
<http://www.ibaraki-welfare.or.jp/home/wp-content/uploads/2013/12/f8cb3d8f5cbfa081cad26c5032014935.pdf>